

1916年 (大正5年) [12歳]

「辰雄日誌1916」No. 3 (その一)

— 1916年7月10日～8月31日 —

小池辰雄

高等師範(現筑波大学) 附属中学校 1年乙組

○1916年7月10日 (月)

雨天。今日は5時に起きた。剣道があつた。僕は道具をもつて行くのか行かないのかがよくわかっていなかったので、坪井君の家に、顔をあらつて出た。家々の戸は五分五分開いていたり閉まっていたりしていた。道は真直ぐであるけれども、電車はかすかにぼんやりして見える。もやが非常に多かった。霧雨かと思われた。空気はおさまって吸い心地がよい。かけるほどにまもなく伝通院に近づく。やがて坪井君の家についた。坪井君は、いないという様なことをいったので、僕は「どうもありがとう」といって、それから家へ急いだ。ついなら急に体がほとほととしてあつくなつて来た。

学校からかえる時、学校で遊んだ。家へかえるとこの頃、非常にねむたい。9時半頃ねた。

○1916年7月11日 (火)

雨天。僕は、常に竹早町の時計に依つて足をはやめたり、遅くしたりした。中学へはいつてから、後れた事^{おく}は一度もない。今日はいつもよりもずっと遅い。しかし後れなかった。博物は、甲虫、毛虫、蝶などをながくとつておく方法をならつた。家へかえつてしばらくすると中央幼年〔仙台陸軍中央幼年学校2年生〕の兄〔次男龍二1888〔生〕が休みになつてかえつて来た。まだつゆがあげないと見えて絶えずしとしとと降っている。兄は軍隊にいてよくものの整頓してある所にいるから家へかえつて、ちらかっているちらかっていると言われた。晩まで雨はやまなかった。

○1916年7月12日 (水)

雨天。朝は普通に起きて学校にもたつぷりまにあつた。

家へかえつたら3年と8月程も生きていた金魚がとうとう死んでしまった。僕はがっかりした。今家に鮒が2匹(この間市川でつった鮒)この間かつた金魚が4匹いる。3年8月前に叔母に僕の病気のときにいただいた。僕になれた金魚は4匹ともいずこへかきえうせてしまった。今日も降りつついているこの雨早くやんでくれればよい。9時半にねた。



○1916年7月13日(木)

雨天。6時15分前に起きた。学校の門の前にきたときは二鈴が鳴っている真最中であつた。僕は驚いて走りだした。玄関の前にきたときには正に鐘の音がやむ所であつた。尚も速めて靴ばこに走り行き大急ぎで靴をとりかえ入ってきたときは5年の人は台の上にのぼって居られた。まもなく号令がかかった。

今日初の地理の時間、試験の答案を見せてくださった。僕は思ったよりもずっとわるかつた。1時間中その説明で先には進まなかつた。家へかえって夕方Note-bookとPenを買いに行った。そうしたら『少年』を売っていたので買った(『少年』8月)。9時半にねにつく。

○1916年7月14日(金)

晴天。夏休はいよいよ近づいてくる。雲もまるまったはつきりとしてくる。学級会もじきに開かれる。1学期の試験も終つた。僕はこの過ぎ去つた1学期を顧みて入りたてに予定を建てたよりも色々なことがおとつていているということを今かんがえて残念に思っている。この夏休はしっかりと。時間を徒費しない様にこころがけた。2学期は大いに奮ばらなければならぬ。今日からお盆である。ぼうさんも来た。

○1916年7月15日(土)

晴天。今日、博物の答案が一時帰つて来た。これも失敗である。今日で事業がだいたい終つた。かえりに僕の家のように近くても汗は自然にぽたりぽたりと落ちる。夏休の宿題が随分である。僕の兄〔長男政美 1894/7/15生〕は今日、大学の入学試験であつた。又その兄の誕生日であつた。おはぎがでた。親類の人なども来た。今日はゆつくりねられる。

〔文庫編集者註…この時代、学校の「授業」のことを「じぎょう」(事業)と言っていた〕

○1916年7月16日(日)

晴天。僕が床を離れたときは日陰は早縁側をうつしている。顔を洗い、朝食をたべ、靴をみがいた。すると母はお盆のまん中であるので皆で巢鴨の染井墓地へお墓まいりに行つた。誰だかが来たと見えて花がさしてあつた。水をまいたり、花をさしたりして、参つてかえつた。かえりに工藤という写真屋に写真をとりに行つた。午後からは何処にも行かなかつた。のんきに遊んでしまった。晩静かになつてからすこし仕事をやってねた。

○1916年7月17日(月)

晴天。今日も歴史の答案がかえつて来たが、これは最上にわるい点であつたので、教えていただいたかいない様で、先生にすまない感じがした。

(止むを得ぬ、しかしその位に考えて居る君は必ず次には立派にやるよ相違ない)〔担任



の短評

〔註…この日記にはところどころに、朱書きで短く感想が付せられている。おそらく、学校に提出した担任の先生の短評と思われる〕

試験場で、ふつと何時のときだか、だれのことだかこんざつして、あたまがくちやくちやになってしまった。数学もかなり宿題がでた。国語の宿題は初めはがっかりしたが、考えなおすと、僕のように国語の力がない者にはためになると思って、する気もでる。ああいよいよ明日から夏休である。

夏休の宿題を始めた。蝉が時々耳にさわる。いつも一樣の声であるので耳になれた。この2、3日夕方、兄二人と僕とで庭の草をとった。母に、奇麗になって精々したといわれた。今日でお盆が終った。お送り火をたいた。

○1916年7月18日 (火)

晴天。暑さは益々加わった。露〔梅雨〕も明けたのだろう。国語課題を午前8時から午後2時半まで2行しかやれなかった。字引を引くと、たくさん出てくる。1字に10分ほどかかる。夜は9時にねた。

〔註…ここにいう「国語課題」というのは、漢字(数百字)を漢和字典でひいてその漢字を含む2字熟語等を楷書毛筆で何十個も書き出すという課題であったと思われる。辰雄は1970年に獨協中学・高等学校の校長となったときに、この課題の宿題ノートを自分の中学時代の学習の参考資料として学校図書館に寄贈している。なおこの他に「修学旅行記」も寄贈している。〕

○1916年7月19日 (水)

晴天。記事なし。

○1916年7月20日 (木)

晴天。通知表の成績。

暑中休暇日記

○1916年7月21日 (金)

晴天。7時に眼がさめた。8時から国語の宿題に取りかかった。18日から2行ずつ怠らずにやってやった。いつか3行やろうと思って居る。今日は相にく夏休の初めの日、誰も大抵は今日で終るのである。1行書き終らない中に、青木君〔青木四郎、中学2年生か〕と武田君〔武田宣彦、尋常小学6年生〕とが来た。二人は7時半頃まで遊んで行った。来た



ので僕は一行書き終えるまでちよつとまってもらった。書き終えてからかたづけ、遊んだ。午前は、蠅をつかまえてそれを蜘蛛の巣にかけたり、また地蜘蛛と蜘蛛の巣の上で喧嘩をさせた。地蜘蛛も巣の上を歩けるから面白い。武器はだいたい同じ様な物を持って居る。また蟻とさせたりした。三人で、面白いので随分こないたずらをした。また畳一丈の間隔をとって、将碁を10個ならべて早く皆殺しにした方が勝ちとしてやった。大抵、力は同じであるから2個か3個位ちがうだけである。こういう様な事をした午後からは、皆徒跣^{はだし}になって、鬼ごっこをしたり、かくれんぼをしたりした。3時頃なんの気なしに、縁側にこしを下ろして、そばの箱のふたを開けて見れば、卵のこわれない様にするもみぎらがはいっていた。すると一人が10位いたずらにぶつけた。それから三人、一人一人の同盟なしの戦が始まった。見る見る中に益々はげしくなる。こうやって居てはきりがいいから、皆一つかみずつもつ約束をした。その中に一人がなすりつけたので、今度はなすりつけっこが始まった。すこしずつやっている。その中に僕の弾丸は欠乏した。それをつけこんだ二人は方向を転じ追いかけて来た。僕はそれにもかまわず猛進して遂に庭に落ちて居るのをつかんでなすりつけた。すると向こうも盛んに弾丸をひろった。今度はどろがすこしまじっているからたまらない。武田君と僕とではかの方で戦乱を開いて居たら、その間に青木君は箒をもってかきあつめ、双の手に持つてあまして攻めて来た。二人は少なくなっていたそこへ来たので、二人で青木君に向かった。その間でも同盟しない約をまもって、すきをねらってはやって居た。こんどはひろうのもやめたが、すぐに手から皆離して湯殿へ体をふきに行った。それから着物を着て外の通りで毬なげをやった。やがて夕飯にもなったのでたべたが、運動したのでおいしかった。それから二階へ行って静かな遊びをした。7時半に二人はかえった。僕はその序^{ついで}に、久保と大登美に行つて用をたして、久保から内〔家〕までかけて来た。非常にあつかった。すこし勉強をやつてねた。

○1916年7月22日(土)

晴天。6時半に蚊帳^{かや}を出た。7時半から国語の宿題にかかった。午後3時までつづけてやったが、5、6字、昨日の分がのこった。それから30分余休んで日記をつけた。国語の書き取りもやった。夕飯がすんでから書き取りをやりうと思つたが、する気がでないのでやめた。国語は午前の仕事となつた。避暑してからこれでは、なかなかくしいだろう。また5時、いいかげん風のおさまる時(女中はこの2、3日国〔郷〕へかえつて居る)、僕は縁側を全体二度ぶきした。そのため〔女中がいらないため〕不自由になつた。時々ぼんやりしているときは、水泳部の事を思い出す。夜、あまりあついたので氷をとっていただいた。なんだかばかに夏休もへる様な気がする。10時、二階の戸を開けてねた。風は蚊帳ごしに吹く。



○1916年7月23日(日)

晴天。今日も午前、国語をやっていた。午後になると益々暑くなって若干二階でねた。今日は別にめずらしい様なことはない。

○1916年7月24日(月)

晴天。朝6時頃、家を出て、母の手紙を持って武田君の家へ行つた。すこし遊んだので家へついたのは9時すこし前であつた。明日は僕は宮城県刈田郡の遠刈田^{かうがった}に行くのである。用意はまだすこしもしてない。永野が時々さびしがって遊びにくる。このごろたいくつになるので温泉でも行きたい。縁側へ出てみると太陽は光をあかくして、かくれようとしている。雲は風に送られて何処へ行くのであろう。空に満ち満ちて居る。明日がまちどろしい感じがする。

○1916年7月25日(火)

晴天。午後から行く支度にとりかかった。買うものを考えて、一通りかつて来た。なお支度を整えた上、たりないものがあつたのでそれとまた母に用がないかがつて、皆買つて来た。5時頃から永野と遊んだ。2時間ぐらい思いきつてよく遊んだ。永野も喜んでいた。

9時半に家を出た。10時に上野についたが、11時の汽車であるから1時間も余つた。10時半頃、武田君が来た。9時20分に改札口は開かれた。11時10分前に僕等は改札口を出た。僕等は10時に来て10分も後れて悲観した。これは僕の失敗ではない。かねがなると共に汽車はプラットホームを離れた。やつとこしかけられた。1時ほどたつとわりにすいて来てゆつくりした。12時すこし前も上弦の月は光々と池の上の水に木の蔭を光らし、水は月の影をくずそうともしない。無数の星は輝々として空に満ち、はるかのかなたに北星がいかに北極の上に沈んでいる様に見え北斗七星は、ひしゃくを倒した様に左肩の上にいた。ああいよいよ12時である。窓ぎわには火の粉がほたるの様に飛んで居る。0時を過ぎれば次の日である。

○1916年7月26日(水)

曇天。零時過ぎである。こんな夜でも今日であると思うとへんな感じもする。段々ねむくなる様子。遂に3時までねてしまった。武田君も僕も。母はもとからねている。月や星は依然として変化の模様をあらわさない。

汽車の中でねむくない時は、木下藤吉郎と言う講談を読んだ。これには秀吉の若いときのいたずらした事など、心の中で笑わないでは居られない。ときどきねむ気がくる。夜明け空がぼんやりと明るくなってきた。霧がぼんやりと四辺を包んでいる。どこの山を見ても太陽の顔は見えようとしらない。まだよほど白石につく間に時間はある。すこし退屈し



て来た。時は僕の氣に入る様に来ない。やつと福島へ着した。上村君は米沢だからここで乗りかえるのだなあとと思った。時計はようやく僕等の下車する時をさしてくれた。今年、遠刈田へ行く者は武田の家から叔父〔武田宣英〕と叔母〔武田松子、小池光子(5女)の妹(7女)〕と宣彦君〔青木三奎の5男、武田の養子に入った〕である。僕では、母〔光子、1869生、旧姓太田〕と姉〔富士子、1899生〕と僕である。下車すれば3、4けんの旅宿相立ちならんで我等をやかましく我が宿へとすすめる。ある1けんの家に入り、車を雇い皆車に乗って進んだ。道がべこぼこしていて頭にひびくばかりである。初2里ほどは大きな道であったが、その2里目の所に休む所がある。そこで休んで次に行くのであるけれども、道幅は広くない。なおゆすぶれる。やつとのことで温泉の影が見えた。無事に到着した。ねむいので早くねた。温泉に入ったが、その温泉は肋膜炎と胃腸にきくそうである。

○1916年7月27日(木)

雨天。午前5時半、僕の眼は開いた。そこで潔く飛び起きた。この頃は母などは眼を開けて居られたが誰れも起きて居なかった。着物を来て温泉に入りに行った。武田君は寝て居たから起こすのもわるいと思つて一人でかけた。雨はしとしとと雨っていたが、露の雨とは異なつて、清々した。外を歩いた時の心持さは仁丹などをのんだ様なことではなく、頭が軽く今考えて筆にあらわせない。一人ほど湯に入っていた。僕が着物を来て出ようとしたとき、武田君が入りに来た。

6時から国語の題を10時半までやった。これで2行やった。晩の御飯は僕の普段のちやわんよりもすこし大なるちやわんに5はい食べた。僕は夕方、上等湯とか言うのを見つけた。一度に1銭であるそうだ。皆この湯にはいることに定めた。晩のすこし前にはいりにいった。だれも居なかった。今日は国語の宿題を2行、算術の宿題1題。国文読本の1、2を書取、読方、解釈、全部した。それと今の日記である。今1行国語をやった。湯にはいつてねた。

○1916年7月28日(金)

雨天。僕等が此処へ来てから青空や太陽を一度として見たことがない。太陽がなつかしい。4日間ほどの連雨ではなく、僕等の来る前から降っていたというそうである。一度、暴風雨が起きてその後に晴れるという様なことを聞いた。

今朝は5時15分に起きた。湯に入つて博物を全体習い、国文読本の3課と4課とをやった。それから歴史を1課やつて10時になった。11時まで武田君と闘球盤〔正方形の盤を用い、木製の円盤を指で弾いて的に入れたり、敵方の駒を弾き飛ばす遊び〕をやった。これで頭も軽くなつた。11時から国語の昨日できなかった本字即ち2字をやったがこれも出来た。なお12時までに算術2題やった。昼飯がすんだのは1時である。2時まで3、4人の人と闘球盤をした。その次に国語課題をしたが2行と3字ほどと日記を書いた。僕の7月27日のが普通の予定



である。いつもこれはこす様に務めている。国語課題ののこりを明日やらなければならぬ。晩はにぎやかであつた。

○1916年7月29日(土)

連雨。僕は此処へ来てから未だ月を見た例がない。月もなつかしい。雨は引きつづくのに水一つとして出ない。博物の宿題ができない。青根の方や山のぼりができない。5時半に蚊帳を出て武田君と温泉へ行った。僕の家では僕が一番早起きである。他の人が一番になつたことはない。またねるときも同様である。両方の家でも武田君に幾度かかった。まけたことは一度か二度である。国語の5課と6課をやった。次に書取の復習をやったが全部あつた。歴史の神武天皇の所をやり、地理の総論の前全部をやつて遊んだ。2時すこし前に国語課題にとりかかった。3行やつて、晩また皆と遊んだ。寝がけに湯に入りまた3時頃にも入った。日記をつけてねた。

(なかなかよくつとめて居ます)〔担任の短評〕

○1916年7月30日(日)

連雨。夜遅かつたので6時15分前に起きた。僕の起きるころはまだ誰も起きていない。便所へいつてそれから湯に行く支度をして、武田君のいる室を見たがぐうぐうとねている。一人で湯に入りに行った。霧が深いので四方の山々は一つの影を見せない。そばにある木もぼんやりしていた。晴れかつたり曇つたりしてやまない。今日は国語の宿題を主にやった。時間がたりないので一日中やっていなければならぬ。この町は小さい。川の音もぐうぐうしだした。毎日同じ様なことばかりしている。かたわらの山の鐘楼に上り鐘を2、3つ打った。

○1916年7月31日(月)

曇天。今朝は6時すこし前に起きたが、姉に今日は一番をとられてしまった。明日からは誰れにも負けない気だ。起きた頃は太陽は、ねぼうだねえという様な顔をして東の森上に上ぼつておられた。10時半から武田の叔父母と母ともう一人の僕の兄のような人とで、牧場へ行った。僕と武田君と姉は家にのこつていた。闘球盤の一種の遊を武田君と考えた。それを2時頃やつた。空には雲が絶えず通過している。日は濃くなつたり淡くなつたりする。植物を5つほどおした。失敗したのもあつた。今晚もいつもの如く涼しい。花火を買つて燈をけしてやつた(燈とは電車の事である)。9時にねる。

○1916年8月1日(火)

晴天。5時10分起床。朝すこし勉強をやつてから、芋堀りといつて、じゃが芋をほるの



である。3段ほどある。宿にも友達が出来た。倉の中に芋を取っては運び運びするので山ほどつまれる。どんどん絶えず出てくる。僕も武田君もとった。虫にさされて、ふくれる。その芋をひく車は所謂一輪車の石で出来ているのである。一人でこれを運ぶと中心がとれるのである。僕もひいたが40間ぐらいの道であるからなかなかひけない。ときどきやすまなければできない。石はこんなにでこぼこではない。もつと円い〔註…石の車輪の一輪車のスケッチあり〕。

この頃、非常にいそがしい感じがする。宿題が多いからかもしれない。後はたいてい同じ様なことをして居る。今日の晩初めて魚を食べた。自炊をして居るのであるが、僕はなんの関係もない。田舎の学校へ機械体操をやりに行った。田舎の人も機械体操がうまい。風の涼しさと共に蚊帳の中でねた。

○1916年8月2日(水)

晴天。5時半頃に起きたが、武田君はぐうぐうねっていた。午前には鰯をつりに行ったが、僕はいかれなかった。いつでも鰯を釣った例がない。何時も釣られてくるばかりの鰯の方がりこうである。針をおられたり、取られたり失敗ばかりである。午後1時後屋根へのぼつて雀を取りに行ったら何処へ行ったのであろう一羽も居ない〔註…屋根の雀の巢、穴の巢の雀のスケッチあり〕。向こうで「チュウチュウ」とさえずっていた。僕等をひやかして居る様に感じた。(僕のとまって居る宿は佐藤旅館という)。夜、僕が縁側へ出て涼しい風に吹かれていると、螢が軽々しく暗夜に光をのこしつつ空高く風と共に屋根の後に飛び去った。

東京から何処からも郵便の来る度に雨という字の書いてないことはない。そう思えば僕等の様な山の奥で温泉のある所はよほどしあわせなのであろう。

○1916年8月3日(木)

晴天。今朝は7時25分前に起床した。朝食を食べてジャボロ(独逸語「ディアボロ(Diablo)」とは空中で回転させるタイプの独楽である。お椀を2個つなげたようなコマを2本のハンドスティックに通した糸でまわすことにより安定させ操る。簡単なスケッチあり)やっている時に青木君の所から絵葉書が来た。武田君は牧場の方(十八町)へ散歩に行った。僕は宿題をやり、鰯を釣って居るのを見に行った。牧場の広さは800町歩程あるそうである。道を行けば、前方に見渡される広々とした野原は青々とした草をはやした、こんな所に自由自在に遊んで居る牛は如何にしあわせであろう。牛の影一つとして見えない様である。7時頃(夜)家の前で花火をやった。友達が3、4人できて、にぎやかである。夜はのんきに過ごした。

○1916年8月4日(金)

曇天。今日は晴れたり曇ったりした。僕は何処へも行かなかった。朝食が終ってから、



宿の忠雄さんと武田君と僕とで下の室で色々な事をしたが、中でも今でもいたい遊びをした。それは立ち膝で二丈の畳のまわりを廻るのであるが膝の所が皆赤くなり、湯に入っても沁みるし又すこしいたい。僕は2回この図の様にまわった。武田君は3回であった。忠雄さんは4回まわった。僕と忠雄さんとは一つちがいである。忠雄さんは14である。晩は晴れたので、電気火花などやった「火花で遊ぶスケッチあり」。湯に入りに行った時は正に湯をおとそうとしていた。今日は国語や宿題また歴史も英語もやった。

(随分な遊です)〔担任の短評〕

○1916年8月5日 (土)

晴天。朝から今日は日が僕をむかえて居る。早く起きて、朝飯をたべて、欄干の所で休んで居た。すると母が1里8町山奥の青根に行かないかといわれた。僕はちよつと宿題が間に合うかみて答えた。武田君は行くといった。僕も行く事にきめて出掛けた。母と保さんと姉と武田君と僕とでいった。叔父母はこの宿に居るのである。ああ、重い荷物が一つできた。それを人ごとに順々にまわすのである。一人の時には次にわたし、二人の時には一人おいて次にわたしという様にして持つていった。保さんの次は僕、その次は武田君である。人通りが寡いのでなかなか来ない。両側は一面野原で鎖されている。だから上り見えず、あたりは青々として三方に山が緑、青、水色という順に色どられている。なお行くほどに武田君と僕とは三人を追い越して2町ほど先になった。人は一人も来ない。段々行く内に青根が見えた。すると片側のがけから3、4尺の蛇が出て僕等の前を横ぎった。すこし行つた所で皆の来るのをまつていた。その頃は何町先に居たかわからない。15分ぐらゐまつた。まだ僕等が先にならないうちに二人来て武田君の番になった。合わせて5、6人来たが僕の番になったことは一度もなかった。青根について室をかりすぐに湯にはいった。湯坪は遠刈田にくらべては話にならないほど大きい。泳ぐことができた。涼み場の所で風に吹かれながら前方の風景を眺望した。山を隔てて海の白帆の浮かぶのを見た。それから、毬なげをして毬を崖から落とした。また湯にはいつてその夜は気持よくねた。

○1916年8月6日 (日)

晴天。6時に起きて午前9時まで2度湯に入つて、9時半頃向こうを出て10時半ごろ宿に着いた。水を飲むと今まで真赤な顔をしていたのが急にさめて気持がよかつた。トラップ等をした。今日はかなりくたびれた。勉強もやった。何も書くことはありません。

○1916年8月7日 (月)

曇天。午前、英語と宿題をやった。すると下から、小池君と僕の事を忠雄さんが呼んだ。



武田君にも呼んだ。それから二人で下へ行った。すると僕等に倉へ来ないかと言ったので、倉に遊びに行った。叔父叔母と母とで青根に出掛けた。倉へ行つて銃等を見せてもらい、また相撲もやった。それから池に行つて、盃舟たらいや唯の板の舟に乗つて遊んだ。午後からトランプや鬨球盤をした。1時間程国語をやった。晩には保さんから岩窟王という探偵奇談をうかがった。話が非常に面白い所に話かたがうまいのでなお耳を二人(武田君と僕)は傾ける。湯に入らないでねた。

○1916年8月8日(火)

晴天。9時頃、上村君と広瀬君と兄の所から葉書が来た。上村君からののは返事である。広瀬君と兄に返事を出した。日記と英語をやった。すると忠雄さんが下で呼んだが、ちよつとまってくれたまえといつて国語をやったが、1課を読んで解釈をつけたきりで下へ行つた。すると昨日の探偵の話のつづきをしてくれといったので、1時間ほど話して上げた。大急ぎでかえつて来て国語課題をやった。夕方、四人程で川の方に行つた。橋は両方落ちて川にまたがっていた。帰りに小川の所で下駄を落とした。流れが早いのでこまった。かえると小雨はほとんど降りだした。10時頃にねた。

○1916年8月9日(水)

雨天。10時頃、青根に転宿するので遠刈田の町を出た。雨が小降りなので初めはよかったが、連日の雨で道が非常にぬかつて居る。僕は、はしおつて下駄をぬいだ。武田君は洋服であった。武田君の父と武田君と僕で先にどんどんと行つた。幸に運走車が来た。田舎の人は親切にも僕らに乗せて上げようといった。僕等は乗せてもらった。すこし道のよい所で下ろしてもらった。その中に雨は益々強く傘を打ちだした。しぶきも来て着物がしけつて来る。暫くして後を見れば四の影も形も見えない。つづら折れの後を、くねりくねつてゆくうちに。片面谷、片面絶壁の様な岩の所をずんずん進む。その内に青根の姿とも思われる人家が霧に鎖された中からうすくうつつた。やがて青根も近いと元氣をつけて来るうちに、雷の音、飛行機の音かとうたがわれるほどに聞こえる。青根へ着した時も、雨は更にやもうともしない。1里8町の道を1時間10分で達した。すぐに湯に入りに行った。遠刈田に比してはくらべものにならない。誰も居ないので盛んに泳いだ。温泉であるから海の様にはいかない。30分して仙台の兄(龍二)と姉(富士子)とが来た。また30分ほどして叔母(武田松子)と母が着した。僕等はよほど足が早かったが、僕にはさほどに感じない。旅館は佐藤と言い、また不忘閣とも言う。昼飯の、おつゆに鯉こくを食べた。夜はにぎやかであつた。9時消灯。

(かなり面白そうなところです)〔担任の短評〕



○1916年8月10日(木)

午前すこしランプのFive hundred「ファイブハンドレッド」という遊びを点につけてやった。500点もまけた。こっちは僕と武田君、向こうは仙台の兄と姉である。武田君はその後皆で百人一首をしたが、僕はよくとれないからやめた。算術と英語と国語(読み)をやった。それから湯にまた行った。朝は毎日入りに行く。ローカつづきであるから便利である。武田君ははなれの方に移ったが、やはりローカつづきである。僕は三つめのとなりに移った。山へ3時頃上ったが、その山という山はたいしたものではない。そこでよく山と山の間の谷間を川が流れて行くのを見た。なるほど、低いところを段々くねって行く。海も山と山の間に所々見える。白帆の影も三つうつった「簡単なスケッチあり」。その中にほつと天からやって来たので急いでかえって来た。此処は実に雨の多い所だ。それはほんとの山奥の谷間であるからであろう。絶えず降りつづけである。しかし水が出た例はない。今日は午後4時頃から武田君と遊んだ。今日も9時ちかくにねた。

○1916年8月11日(金)

雨天。朝食の前後に通じて闘球盤をした。それから算術と英語をやった。午前10時頃、花火のいたずらをやった。この花火は大きな音と共に後へ2間ほどとぶ。火をこの図の様な所につける。すると火は火薬に近づき遂には火がつく。するとその紙の巻いたものは後に飛び火は前にとぶ。その後を姉の方にむけて放った。すると、はたして命中した。僕はこの花火がまた持っているうちで一番すきである。7時頃から(午後)例のランプの復讐戦をやった。また初めからである。ランプは進む内に僕の方は聊か形勢いさながわるい。奮戦したが遂に負ける事90何10点。向こうでは100点差をこえろと言った。僕等はまだ負けずやった。次の戦では勝利を得た。勝ったり負けたりする内に僕達は益々形勢良好、遂に300点の勝利を得た時は9時も過ぎ10時である。復讐戦の効能はここにあらわれた。今日気持よくぐっすりとねこんだ。

○1916年8月12日(土)

雨天。昨日のつかれで7時に目をさました。9時頃、武田君と絵をかいで遊んだ。僕も武田君もランプの絵をかいだ。僕は、ランプの紙と同じ大きさに切って、Joker「ジョーカー、道化師」を書いた。2時頃、湯に武田君と一緒に泳ぎに行った。夜毎に言いつかつて郵便を出しに行った。また序に葉書10枚買った。明日、仙台の兄が軍隊にかえるので(29聯隊(仙台)遊んだ。傷にきく湯に入ってた。

○1916年8月13日(日)

今日は曇天。雨天の後、晴天、夜雨来る。今朝は、不審にも5時15分前に目がさめた。



15分ほど床に入ってねた。5時に床を出て5時5分ごろ皆で湯に行った。その湯は、暑いので僕は口をすすいで武田君とほかの温泉へ行った。ひとへのしもしいいかげんできる。ひら泳ぎもできる様になった。7時に此処を出る約束であった。田舎ののんきな事7時に遠刈田を俾くるま〔人力車〕が出たという。1時間ほど面白く遊び過ぎた。その内に俾が来た。時は8時であった。すぐに用意をして下へ下りて行った。俾は下に待つて居った。しばらくして俾は雨の中を走り出した。この時、急に身にしみて淋しい感じが起きた。

皆で僕の室へ来た。武田君の父〔武田宣英〕は説明された。それはローカを伝て行くとすこし外へ突出している所に額がかかっている。その説明である。それは従四位の金井という人が書かれたのであるが、それは木にペンキで書いてあつて真にそこに書かれたのではない。それには何時来たという事や此処の温泉風光を賞した事などが漢文で書いてあつた。中には不忘閣ふぼうかくと大文字で書いてある〔註：宮城県柴田郡にある青根温泉は、伊達藩の湯治場として1528年に開湯して以来490年以上の歴史を誇る名湯。中でも「湯元 不忘閣」は、青根温泉を代表する老舗旅館として多くの文豪が訪れたことでも知られている(ウィキペディアより)〕。これはこの宿のことである。また反対の突出して居る所にゆけばこんどは支那人の書いたのがあつた。これもやはり真中に不忘閣と書いてある。両方比較すれば、遙かに勝っている。それこそ筆勢非凡である。不忘閣(何れも行書)。

時々、仙台の兄は今どの辺などと想像もした。午後3時目カラフトの尺八を吹く人の所へちよつと行った。尺八を吹いて見たが時々、偶然に時々なる。樺太の話など色々聞いた。晩は非常に淋しく感じた。

○1916年8月14日(月)

晴天。ああもう夏休も半過ぎ、2学期も近くなつた。皆9月1日はどんな顔をしているだろう。午前は国語の宿題をやつた。午後3時頃までは(正午から)となりの人とランプや闘球盤をした。3時頃、下の店に花火を買いにいった。その途中で青木君〔四郎、中学2年か?〕と青木君の弟の泰ちゃん〔泰彦、尋常小学3年生〕に出した〔手紙〕。めずらしい花火であつたから、武田君と一緒に買いにいった。それを宿へかえつて二人で、どんなものかためしにやつて見た。すると、ちちちちばあんといつて3尺ほど後にとんだ。そこで僕はとつてすてようと思つて、手をそばにやつた。すると急に中から黄色い煙がもやもやと出て中から時々あかいものが出る。そこで二人で「これは大変だ」といつて、鯉ぶしをかけた紙ともしらずとつて火の上にかぶせてはとりとりとつて火をけそうとし、また母の日誌帳とも知らずはたいした。そばに不幸にも蒲団がない。その中に煙はふえる様。煙はくさくさこまつた。大急ぎで消した。後を見れば硫黄で畳の上に黄色く走つた跡や二寸四方ぐらい畳についた。湯と石鹼で誰も来ないうちにふいた。幸にすっかりとれた。しかし悲観なことには畳に薄く一寸四方ぐらいやけた。また鯉ぶしがかいてあつたのがなくなつた。そこで二人で一心



にかいていた。すると姉が来て「どうしたの」と来たので、僕等はしかたなしに白状した。そこで母にも話した。母の日誌帳にすこし跡がついた。そこで僕はこりて、皆すてた(5本)。ほかに買ったのをやった。晩は6時頃、夕飯を食べていた。すると武田君が満月だといったので、大急ぎでたべて行つた。すると、なるほど満月である。雲は月の下に棚引いて、山はまたその下に淡く見える。そばの山は黒く、ものすごく影をあらわしている。やがて一天より雲吹き来たつて月に向かう。30分ほどすると月の半面と段々姿をかくした「山の上にかかる満月のスケッチあり」。それから家へかえつてねた。

○1916年8月15日(火)

晴天。日記には晴天と書きながら、太陽の出ない日は多い。朝飯前、武田君が日の出というので武田君の家の方に行つて見た。すると太陽は首を雲からまだださない所であつた。しかしあたりの雲の片側は金銀と、またそれで僕の眼を照らす。その中に太陽は首を出した。尋常1年の2の巻の2課にある様に、日は見る見る内に全身を空にあらわした。雲をこえ遂に空高く上つた「雲間からの日の出のスケッチあり」。その内になんとなく空はぼんやりとして太陽の影もいつしかみえなくなつたが、世はくらいいほどでもない。

その頃は武田君や武田君の父やまた二人ほど僕のこの頃新しくなつた大人のひと案内人で、刈田山や峩々山へ行き高山植物をとりに行つてゐる時である。6時頃こつちをたつた。僕はいそがしくて、いかれなかつた。皆が宿に着いた時は午後3時、僕が湯に入つて居る時であつた。それから湯から上り、行つて見た。すると高山植物をとつて来た。僕は武田君にすこし植物をもらつた。もう一人の人にも二人でもらつた。花火等もした。今日は8時頃、床に入つた。

○1916年8月16日(水)

晴天。午前平凡に家で暮らした。午後からは2時15分前に武田君と二人で峩々の方に行つた。武田君を案内者としてどんどん行つた。よい、めずらしい花などをとりながら進むうちに危険なげや木のもうもうとしげつた暗い所など数箇所通過し、その内に川に出た。その川は濁川という。ここへ出たのは即ち一つの山をこえたのである。この絵の様に円き橋は安全な物でもない「丸木橋のかかつた川のスケッチあり」。たいていのものは、ここははつて渡る。僕もはつて渡つた。下を見れば、あだかかも自分がうごいて居る様である。目がくると落ちるそうである。渡つて次の深山にはいりかかつたら、武田君の下駄の緒が切れた。そこで僕は僕の帯はいらないのであるから、すこし裂いて、ついた。行こうとしたが二人では、物凄い先は石が両方からこつこつに出、また上りで森になつて、寂としている。且つ時間もすくなく、天候も怪しいからそこから引きもどした。こんどは僕は危険を犯して、立つて渡つたがなんともなかつた。しかし下にながれている川は非常な急流でこつこつと



響き円き橋にふれて振動する様に感じた(本当にそうかもしれない)。植物もさがしながら帰った。花をたくさんとって帰った。着いてから二人で湯にはいりに行った。9時15分には僕の目はあけようとしてもあかないので、床をとって1秒もたたないかと思う内に眠りについた。

○1916年8月17日(木)

曇天。朝6時15分前に、ぱちつと開いた。前晩はめずらしく夢を見なかった。湯に入り一人で رفت。8時頃まで遊び、それから勉強をやった。10時半から高山植物をかんにうつした。また植物の宿題をしらべた。午後から雨が時々降り、濃霧になった。前の木さえぼんやりとしている。あしたは仙台へたつのである。明日もまちどろしい。荷づくりをした。明日は早く(6時に出る(青根))たつのであるから早くねた。最後の僕のすきな湯のわかれと長く入った。

○1916年8月18日(金)

晴天。仙台市見物。朝、大湯に入った。その頃は起きている人もまだ少数であった。支度をして出発しようと下へ下りて来た。武田君の家ではこれから湯に入る所であったが、ほかの支度はすつかりできていた。武田の叔父は5時半頃出ようといっておられたが。午前6時10分に宿を発した。皆、俵に乗った。出るときに尺八を吹く人ともう一人の金子という人と別れて宿を出た。日は照らず、雨はふらずという天気であるから汗が出なくて丁度よく適して居た。俵は距離を経れば経るほど足をはやめる。以前に居た遠刈田の宿の前に行き、ちよつと挨拶してまた進んだ。こんどは同じ程度の早さで行く。前よりも道はごつごつして居てゆれる。天候はかわらない。しばらくすると遠刈田の町も見えなくなる。8時20分に永野に着した。青根を去ること3里余。

割合…青根——(1里8町)——遠刈田——(2里)——永野——(4里)——大河原

永野で朝飯を食べた。俵夫も食べた。僕達は握飯を食べた。9時10分前に永野を出発した。こんどは道がどこよりも平らかである。しかし、一ヶ所ほととの5間ほどどうしたのだから非常に道がわるい所があった。そこで僕の乗って居た俵が落ちこんで俵は左に傾いた〔傾いた人力車のスケッチあり〕。すると俵は前にさがって僕は小川ほどでもない小さな川の中に両足つつこんだ。読んでいた東西遊記抄もすこしぬれた。奥州白石の城下から1里半南の才川も程ちかく思われる。矢附村や小山田町を通過して大河原に着したのは11時10分前であった。来たときは白石であったが此度は大河原である。

青根から大河原までくる間に歴史1課と英語2、3課と東西遊記抄をすこしよんだ(俵上)。駅へ着いてから高山植物を包みかえた。また自分の思っ居る駅をあてっこしたりして遊んだ。11時31分の汽車に乗って仙台さして رفت。僕は武田君に中学の事など笑話のよう



なことなど色々話して上げた。やがて仙台へ到着した。仙台の兄〔長兄政美〕の家に行った。武田君は停車場から明らかに見える陸奥ホテルに行った。昼食をすまして、日独戦争の写真を見た。この家には次朗という、いたずらをしそうな犬が1匹いる。しかしいうことはよくきく。チンチンという和前足2本上げて立つ。菓子をもつて来て、投げてやると食べようとする。そこをおあずけと言うと前足2本上げて外を見ている。ゆるすといえれば食べにくる。高山植物に水をかけてやった。仙台見物をしようとするころはやがて2時である。時が遅いので俥に乗って出掛けた。武田の叔父母と武田君と姉と仙台の兄と母と僕である。初め先ず躑躅ヶ岡や桜ヶ岡を見、4聯隊の前を通過して坂を下りやがて宮城野の原に出た。その時の眺望は東京の士官学校の運動場の何倍あるかわからないほど広く青々と見渡される。その向こうのはては見えない。僕の中央幼年の兄〔次兄龍二〕がしきりにほめていたこともよくわかった。遙か森の蔭に幼年学校の白壁が見える。兄があそこに居たと言うと思うと校舎もなつかしい。29聯隊も遙かに見える。そこで丁度、砲兵隊が練習をしていた。なお政岡の基へ行った。それから向山をさして行った。向山の上に上つて茶屋でこしをわけさせてもらった。仙台の兄に学校など説明していただいた。ちよつと見れば油絵やパノラマの様である。向山は相当に高い山である(時は4時半)。眼下に見下ろされる広瀬川の川は、さながら膏の様に淀みて静かである。上流の方では鮎釣りをしている。遙か向こうに青々と空と境のない様な色をして海が見渡される。その中に白帆が二つ三つ絵の様に止まって浮いている。遠く宮城野の原は一面に緑色の毛氈を敷いた様に、近く森は仙台市中に点々と行き渡っている。その森の蔭には或は白壁の軍隊の校舎、或は土蔵の様なもの、人家の横の白壁も間に点在し種々様々である。これも学校が多いからであるからであろう。下を見れば、さつきから同じ人が石にこしを下ろし、のんきげに釣竿を持っている。右手の方に橋が架かっている。橋も白や緑などで奇麗に見える。左は山がある。向山を下るときふりかえって仙台市全景を一目見て石段を下りた。それから母はほかへ行つた。かえりは大きい吊橋を渡った。なるほど橋には下に棒がない(僕の絵はすこぶるまずい)〔橋脚のない吊橋のスケッチあり〕。大通りを行くうちに東北帝国大学や理科大学、第二高等学校等をすぎ、6時に家に到着した。夜散歩しながら仙台の兄の下宿に泊まりに行った。母はそれからかえつた。ハーモニカとビスマークの伝記をいただいた(本)。9時にねた。くたびれたので、気持よくねた。(22日に大略を書いたものを見、また思いうかべて書いた)

(いろいろ見学のできた日です)〔担任の短評〕

○1916年8月19日(土)

晴天。塩釜及び松島見物。起きて帰る支度をして、7時半頃、仙台の兄の家へかえつた。9時55分(午前)の汽車で仙台を発した。三つ目の停車場の塩釜で下車した。下りれば横は川である。舟が一ぱい並んで居た。しばらく町の中を行くと、塩釜の所にくる。塩釜とは



昔、はじめて塩を釜でにたという古い釜が四つあった。大きな釜であった。1町程進むと、200段もある石段をのぼった。上へあがると足は棒の様になった。前面に塩釜神社があった。門前で藁草履にはきかえて中に入った。下は石で畳んだ広い道がついている。鳩の多い事は浅草にもまさるほどである。それから参拝した。中に明治天皇の玉座があった。神社のそばに林与平の作った石の日時計があつた〔日時計の図あり〕。入口に御守りをうっている店が並んで居る。参拝してから、休んでから、また下りて海へ出て和舟に乗った。東風は相当地に吹いていた。櫓でなく帆によつて進んだ。僕はこの頃しばらく舟に乗らないから非常に海上をゆらゆら行くのが愉快でたまらない。しかも日本三景の一つといわれている松島であるから。まだ松島のよい景色もわからない。12時も過ぎるので舟の中で景色を見ながら、握飯や麵包を食べた。僕はハーモニカ等をふいた。武田君と僕は舟の先の方に居た、その心持の善いこと何をもいえない。生まれてから、こんな奇麗な美しい景色、またこんなのにきな所へは来たことがない。片帆で風のために舟はかしぎながら進んで行く。船頭も面白だろう。舟にはテントがかかっている〔帆船のスケッチあり〕。海上に藻が浮いて居るので、僕は博物の宿題によいと思つて、とつた。やがて広々とした。松島の真中に出た。何処を見ても名の如く松の島ばかりである。我が舟は方向を転じてある所を目がけた。陸つづきかと見れば無数の島のかたまりである。海は島によるほど、おだやかになる。ほんとの小波が舟の横にびしゃびしゃとあたる。島々を廻つて、ある所に着いた。そこには、上るように石段がついている。麓に雁金森としてみるであつた。その上には石段がない。九折の道で上までちよつとある。上に着くと茶屋が一軒ある。叔父が「此処は寝て見るとよい」とおつしやつた。僕等も寝て見た。これもまたよい景色である。茶屋のばあさんが島を説明してくれたが、名は覚えきれない。白帆は島から出ては隠れ隠れしている。海の中にTの字形になつて浮いて居る。魚をとる物も面白い。遙か向こうは外海で軍艦か、汽船の形が見える。海面は穏やかで白帆の蔭、遊覧船、何れも松にうつりよく色どられて居る。今日は天には夏雲もあまりなく松島の景色は引立つて来る。近くの松の面白い枝ぶりのはつきりと見えるのもよく、遠く淡く見えるのもよい。僕等は風に吹かれながら、涼しい中から松島の景色を十分味わつて居たが、また見たい感じもした。山の上から見るのも舟の中から見ると一種異なつて面白い。舟に再びうつり、間もなくある島についた。その所は二つの島でその間に朱塗の橋がかかつていた。その上に行つたが、下は静かである。泳ぎたい気持もあつた。それからまた舟に上り、松島さして進んだ。間もなく着いた。

それから埋木細工をうつて居る所など見て、観月亭という宿屋に入つた。それから瑞巖寺に行つた。一人のおばさんが案内と説明してくれた。瑞巖寺という所はこの宿屋のうらの方一面を言うのである。600余年前の僧が寺に住みきれなくなつて300の穴をほつて、その穴の中で座禅をしたという。大きな穴がある。ある穴の奥には宝物を昔、某がかくしておいたのを北條時頼がそれを見つけてとつたという穴もあつた。奥に1尺四方位の穴があつ



て、そこにはわからない様な戸がしまつて居たそうである。今は戸がなく穴も浅くしてあるが、昔は非常に深いものであつたそうである。それから瑞巖寺に行った。その門の側に5、6本の大きな直径4尺ぐらいありそうな杉の木があつた。それから寺の中に入り、僧に案内また説明されて入つた(瑞巖寺とは伊達政宗公の建てた菩提寺のことである)。室は何の間、何の間と区別されてあつた。中に明治天皇の玉座があつた。また政宗公の考えた、武者がくしといつて襖に見せかけた所があつて、そこは非常なしかけで開くのでちよつとわからないそうである。その士はその中を行くのである、ローカがあるそうである。それから段々を上がつて天井へ行くのである。天井を見れば金網でいけるように出来ている。一千人ぐらいの士はかくれることができるそうである。裏へまわつて住持にあつて皆で話を聞いかえつて来た。次に裏の田に出て、葉山神社の麓のほうで参拝して来た。ほつと花をつむときに思いだしたのは、舟の中でとつた海草である。もってくるのをわすれた。そこでこんどはその辺にある、僕の名の知らない花を2種とつてかえつた(博物宿題のため)。

宿についたときは5時頃であつた。しばらく休んでいる中に叔父がまた、室の床の間にかかっている掛物にかいてあることを説明してくださつた。それにはこの松島を非常に賞めて居た。文句は覚えて居るが字を忘れた。夕方、湯に入つた。縁側で僕は十分景色を眺望した。空は夕焼けで一段と景色のよい上にまたよくした。今も目にうかぶ。夜になつた。側を見れば舟に赤い提灯を上げている。なんであろうかとたずねた。それは舟行列だそうである。段々くらくらなつて来た。今日は、灯籠流しである。ああ僕等はなんと運のよいときに来たのだらう。こんなことをやるのはめずらしいそうである。そのうちに遙か向こうに無数の燈籠、横体になつて浮いている。中には赤いのもまぎっている。灯籠流しとは灯籠をある岸から列をなすようにして流すのである。別になんにもつないではないのである。また灯籠とは2尺四方位の板の上に蠟燭を立てまわりを紙でまろく囲むのである。丁度、提灯のようになるのである。今日は丁度あげしおで灯籠は次第次第に僕等の方向に来る。終には群をなして来る。波は頗る穏やかである。そのうちに13隻の和船、提灯を各12程つけて、縦体の前を横向けに走る。ちつともゆるえずゆるやかに走る。その行く形、提灯の山が走るかと思われる様で、影は水の深さをあらわして居るのであらう。正に提灯のほかになにも見えない。列は輪になったり横体になったりする。灯籠は目の前の海岸に来た。その様子、海上に提灯が浮かぶ様である。灯籠は反対に向こうへ去りそうである(「灯籠流しのスケッチあり」)。

9時も過ぎ、おそくなるので床を敷き寝る支度をした。舟もいつしか影をかくし、灯籠も遠くなる。僕等はここに気持よくねた。

(面白かつたためかなかなかこまやかに書いてあります) [短評]



○1916年8月20日(日)

晴天。6時半頃、床を離れた。日ははや森より1尺ほど上におられた。植物を水につけておくのを忘れたので枯れて居た。齒を磨き顔をあらひ朝食を食べた。出掛けるには時間がすこしあるので、母の許しをうけて、仙台の兄と武田君と僕とで海に入りに行った。僕は松島に行ったらは是非海にはいろうと思って居た。それをはたすことが出来て非常にうれしかった。先ず着物を脱ぎ、舟つき場の所に来た。時はあげしおであった。舟のつくくいも半分みえないのもあった。さるまたの先を水にぬらした時は、へんな気持がした。それからすぐ全体をぬらして海にとびこんだ。海は奇麗で波はなく、ひら泳ぎの練習には最もよい。十分泳いで陸に上った。先ず目的を達してうれしかった。

それから用意をして出掛けた。初め新当山へ上って、東屋の下に行き松島を眺めた。ここはあまり感服しなかった。そのそばには、観月亭の離れがあった。誰も居なかった。中に今生天皇陛下の御身影がおかれてあった。再び下って観瀾亭かんらん(波を見る所)の中にはいった。ここは政宗が秀吉に茶室をもらったのをここにうつしたのである。その後、観瀾亭につけた。襖の絵などは古く立派なものであった。畳屋がきて畳をとりかえていた。すぐ舟にうつった。舟は松島を後にして離れた。帆によつて進む。松島の景色は次へ次へと移り行く。今日は風が強いので勾配80度、しかし非常に早く進行する〔80度に傾いた帆船のスケッチあり〕。やがて松島の海岸も島を廻り行くうちに見えなくなつた。

眼前に見える扇谷おうぎだにという島に上った。何故に扇谷というかといえば、扇谷から見ると前の景色は丁度、扇をひろげた様な海で、中に島が点々として見える。それが扇の中にかかった松島として居る。眼下にかなめ島がある。それはあだかも扇のかなめにあたる位置にあり円い。その扇の後にあるので扇谷と名付けたのである〔扇谷のスケッチあり〕。松島を見る中で最も有名な風景のよい所は扇谷と大高森という島である。

山にのぼって見ると、小さな家があった。そこには79になる白髪の老人が居た。あご鬚長く、腰もまがらない元気な人であった。その老人が島を色々説明してくれた。よくわかった。風は十分に吹いて来る。風と風景と相待つて実に筆にもあらわしがたい。僕はこのとき「松島や、松島や」という意味もよくわかった(芭蕉)。これが松島を眺める最後であると、景色が目にかぶほど熟視した。

山を下り、舟にうつった。それから海草の事を思いだして海草をとった。こんどは最もよいのを5本とつてやめた。夢の中に松島の景色をとりすぎて、今は塩釜の港である。汽船も勇ましく後から来る。舟から下りて停車場へ行き、汽車に乗つて仙台めがけて進む。松島の影はいつの間にか消え、今は田の中を走り行く。

仙台へ着したのは午後2時過ぎであった。皆で仙台の兄の家へ帰着した。晩、御馳走になつて11時の終列車で仙台を去った。中はこんで、やっとかけた。仙台の兄も叔母も送つて来られた。汽笛と共に汽車はゆるやかに動きだした。そのときへんな気持がした。姿が



遂に見えなくなった。武田君はすぐねてしまった。僕は英語を6課と歴史を2課やってねた。
3時頃。(25日につける)

○1916年8月21日(月)

晴天。5時半に目がさめた。こんどは武田君は起きて居た。皆は朝飯を食べたが、僕は食べなかったので食べた。8時15分前に大宮へ来た。それから15分で上野へ到着した。しばらく、電車を見なかったもので、へんであった。中は非常に混雑したが大塚行に乗りかえたときは非常にすいていた。武田君は江戸川行にのった。女中はまつて居たことであろう。家へかえって、金魚をみれば2匹死んだ。大きい金魚と鮒2匹だけであった。(9時家に着いた)つかれたのでかたづけしてから、5時間も寝た。早く寝た。(夜)

○1916年8月22日(火)

雨天。朝から降り続けた。高山植物はかれない。国語課題をやった。また博物の宿題全部終わらした。9月の「少年」をよんだ。きけば、青木君達は18日にかえったそうである。僕はまだ帰らないのかと思った。仙台の兄の所へ手紙を上げた。

○1916年8月23日(水)

雨天。午前、算術の宿題19番までやった。母は朝からよそへ廻った。またビスマーク伝記をすこしよんだ。午後から(2時から)国語課題を6時間半ほどかかって4行やった。夕飯後、ハーモニカの練習をした。雨が降っても蟬の声はする。10時頃、湯に入った。母は10時頃、姉と共におかえりになった。

○1916年8月24日(木)

晴天。7時半に起きた。日記を書いた。松島見物のであるから、隙がとれた。母はちよつとした病気でねて居らっしゃった。隣の永野がうるさくてしょうがない。また午後から国語を4行やった。また寝たのはおそかった。

○1916年8月25日(金)

晴天。6時半起床。7時から高山植物を鉢植えにして蔭においた。種類は4種ほどある。7時に終った。朝飯をすましたのが8時すこし過ぎていた。9時から勉強にかかった。先ず20日、21日、22日、23日、24日、25日の午前をつけた。12時30分前に後つけた。それから英語を1課やり、昼飯してからまた1課やった。昼飯食べて一足歩くと針の目の方がささって2分ほど奥へはいった(かかとの所)。僕はいたいといって腰を下ろして見た。びっくりしてぬいた。先ず先でなくてよかったと思った。またしあわせにもかかとの革の厚い所

でよかった。一番上の兄〔政美〕の所から英語の葉書がきた。所々よめなかったので母にうかがった。兄は片瀬にいる。午後から国語の課題をやった(2時より)。僕は1字にたいいてい5分かかる。6時頃、夕飯を食べ、7時まで外で休んだ。それからまた引き続いていた。10時に寝た。この頃は暑いので戸と戸の間1尺5寸位ずつ明けた。夜はのために風がよく流通して涼しい。

○1916年8月26日(土)

晴天。7時半に起きた。朝起きたのがおそいので蝉はやかましく鳴いていた。午前から国語課題をやった。10時頃、吉原〔吉原とも子、和子? 小池光子(5女)の妹(6女)〕と青木の叔母〔かく子?〕がいらいしやった。僕はあまり暑いので着物をぬいで、しやつをきて勉強をした。午後1時半からまた始めて4時までやり、それから1時間ほど休んだ。夕飯前後は「少年」をよんだ。それから算術をやったが答がちがった。1時間ほどかかった。今日は9時半頃ねた。青木の叔母と吉原の叔母はそのころお帰りになった。

○1916年8月27日(日)

晴天。7時に起きた。8時頃、二階に上った。すると母が僕に、為替をくんで来ておくれとおっしゃったので、郵便局へ行つて、くんで来た。ついでに僕は筆を2本買って来た。その筆は非常に書きよかったので早くかけた。昨日の算術のやりかえをした。こんども1時間とすしかなかった。午後から6時まで課題をやった。夕飯がすんでから英語と課題のつづきをやった。9時にあまり眠気がくるのでねた。今日は湯がたつたので夕飯後十分に出来なかった。

○1916年8月28日(月)

晴天。この頃の如くに目がさめた。9時半ごろまた青木の叔母と吉原の叔母とがいらいしやった。しばらくしてから武田君が僕の家に来た。15分ぐらい居て帰ったが、それはこれから青木君に遊びにこないかといわれたそうである。僕はいそがしいので行かなかった。青木の叔母と吉原の叔母は昼飯をたべて3時半頃おかえりになった。武田の叔母も昼飯を食し6時頃御帰りになった。今日は一番上の片瀬に居る兄が家へお帰りになるので、僕は時のたつのを喜んで待っていた。今日の勉強はまず予定どおり出来た。11時頃まで床で目をさまして待つて居た。なお下駄の音も聞こえないので僕等は遂にねてしまった。

○1916年8月29日(火)

晴天。今日はほんととは、青木君の所から皆で家にくるはずであったが、それもやまった。英語や国語を若干やつて10時頃、和服で袴をはいて坪井君の所へ行つた。心配しながら行つ



たが、幸に坪井君は帰って居た。行ったら二階へ上り、宿題の様子を見せてもらった。それから坪井君に一人ランプを3種、教えて上げた。植物の宿題はきれいに上手にできていた。それから夏休の両方の事を、互いに話しあった。愉快であった。それから坪井君の所に、夏休に來た葉書を見せてもらった。中に森本先生と石黒先生からの御葉書を拝見した。それから僕は坪井君はどうして御所がわかったのかそれを聞いた。すると夏休の皆の行く所を書いたものの一番終りの方にあると聞いた。僕はびっくりした。僕はあれには皆の所だけだと思って、先生の所に暑中御見舞を出そうと思ったが、そこまで注意しなかった。僕は思わず、しまったなあと思って声を出してしまった。石黒先生は一時御病氣であったということをした。御病氣の当時も察せられる。その内に12時になったので僕は帰ろうとしたら、坪井君がちよつと待つてくれといつて外へ出て來た。樂屋へ行くそうである。一日の事や宿題の事など色々たしかめて、家へかえった。このごろは魚の香もかがない。コレラがはやっているので家では魚はたべない方がよいといつてたべない。水ものまもなく。学校も目前にせまった。あとは別に書くことがないが、晩御飯をたべて二階に行こうと思ったら、兄が片瀬からかえつていらつしやった。あの黒い上にまた黒くつやがでて、黒光である(背)。母もすぐ後で外から帰つて來られた。

〔註：大正5年8月から12月にかけてコレラの流行があり、40府県で患者1万余人に及ぶ大流行であつた。(ウィキペディアより)〕

○1916年8月30日(水)

晴天。宿題のしらべなどしたが、国語の宿題が残つて居た。一日やった。

○1916年8月31日(木)

晴天にして風涼し。宿題様皆すまし、晩は時間割等そろえて気持よくねた。風は涼しく吹くので勉強もしやすかった。湯に入つた。

日記終り。

(有益な旅行をしながら絶えず学課の方の復習を怠らなかつたことを喜びます。いつまでも今年のように夏休を有益におくられることが出来るように祈ります。)(担任の短評)

